

ふるさとの文化財散歩

伝昌寺の板碑

市指定有形文化財第十二号

この板碑は死者の追善供養のための塔婆の一種で、緑泥片岩によって作られています。鎌倉時代から室町時代にかけて関東地方（特に埼玉・群馬県方面に多い）で盛んに造立され、中世の信仰と社会生活を知るうえで貴重なもので、市内に唯一現存している板碑です。



厚さ 一・九センチメートル
幅 二・二センチメートル
長さ 九一センチメートル

この板碑に刻まれている年号は、南北朝時代における北朝方の年号の貞治二年（一三六三年）二月とあり、インド古代文字の種字の下に一輪さしに花をさして供養の心に何かを語りかけてくれるようです。

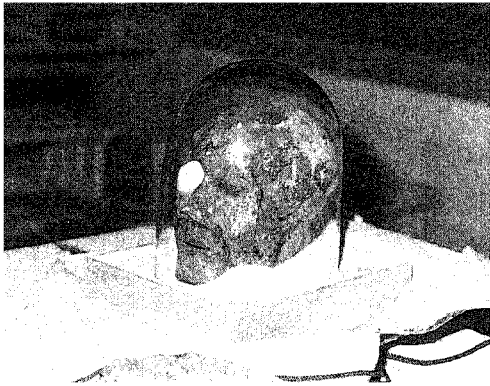
をあらわしています。現在は曾雫の曹洞宗東光山伝昌寺が無住となったため、馬場の同宗旭洞山本光寺に保管されています。

この板碑がどこで作られ、どのようにして運ばれてきたかは知る由もありませんが、青みがかったこの板碑は現代の私たちに何かを語りかけてくれるようです。

石船神社の復元首級

市指定有形文化財第十八号

今から約六五〇年前、鎌倉幕府の滅亡後間もない頃、後醍醐天皇の皇子であった大塔宮護良親王は建武の中興に功績をたてましたが、足利尊氏の中傷を受け、鎌倉の土牢に入れられ、建武二年（一三三五）七月十一日に足利直義の家臣によって殺されてしまいました。側室の雛鶴姫は、御首級を携え従臣らに守られ、秋山村からこの地へと逃れてきて、護良親王の御首級を石船神社へ奉安しました。おりから産気づいていた雛鶴姫は秋山村と都留市との峠で皇子を生みましたが、ついに力尽きて死んでしまいました。その後、従臣た



ちはこのあたりに農民として土着したと伝えられ、雛鶴姫にまつわる伝説や地名、史跡も多く残されています。

奉安された護良親王の御首級は、代々、地元の人々の厚い信仰の対

象となり、大切に祀られています。その御首級は、専門家の調査によると日本最古の復顔術が漆により施されており、大変貴重なものと鑑定されています。御首級は年一回、一月十五日の石船神社の役員の交代式の折、公開されます。昔は石船神社の東側にある高根山の頂に日が昇る早朝にその式が行われ、古老の話では「尊いものとして子供たちには見たくても見るのできないもの」でした。現在では地元の方々の計らいで午前十時頃から引き継ぎ式が始められ、多くの方々が拝観できるとなりました。ムササビの住む神社として全国的に有名な石船神社にもこのような伝説があり、ふるさとの歴史の奥深さを感じます。

都留市文化祭受賞者

十小中学生俳句入選者
文化祭賞

弟の

ぜんそくなおれ一年生

川上へ

川上へ飛ぶ石たたき

なにげなく

わが影を見る秋の風

東桂小五年 志村郁子

入選

うるこ雲

夕焼空でたいになる

東桂小四年 志村美保

かけ稲が

しくしく泣いている雨つづき

東桂小六年 関戸佑佳

波よせて

浜べに書いた絵が消える

禾一小六年 深沢浩美

貝がらに

耳をかたむけ波の音

東桂小五年 羽田裕美

赤えのぐ

こぼしてえがく夕焼空

東桂小五年 山崎絵里

秋風へ

ゴール決めれば湧く拍手

禾一小六年 野中寛之

いねかって

母の優しき目にあいぬ

東桂小六年 伊藤一成

これからは

リニアの里だ紅葉もえ

禾二小五年 榎本恵理

手の上の

柿がざぶとんしいている

禾一小六年 矢野ゆかり

川の音みんながゴミを流すからなんだか川も泣いてるみたい

禾一小六年 村松まゆみ

タンポポの秋咲くを見て

首ひねる季節はずれの

ひとり咲きかな

東桂小五年 渡辺美保子

柿の実が真っ赤になった

庭の中むくげの花は

まだ咲いている

東桂小五年 角田直樹

木の下に坐って見れば

木もれ日の光まぶしく

ひたいに手を当て

東桂小五年 深沢賢至

みらいへと皆がさわぐ

夢をおうさあ開けてみよう

心のまどを

禾二小五年 小林由起子

赤とんぼ稲穂にとまり

やすむなり冬の寒さは

いずこですぐす

東桂小五年 天森美予子

十小中学生詩入選者
文化祭賞

入選

谷一小 三年 酒井直人

谷一小 三年 戸沢史香

谷一小 三年 小太刀あづさ

谷一小 三年 天野栄奈

谷一小 一年 あまのわかな

禾二小 五年 平井貴大

禾二小 五年 熊坂貴子

禾二小 五年 天野隆太

東桂小 五年 桑原美佳

東桂小 五年 堀口 真